

ドイツ語圏の大学における会話教育の実態 —教師に対するアンケート調査から—

(Bericht über die Ergebnisse der Online-Umfrage
zum Konversationsunterricht
an den deutschsprachigen Hochschulen)

高邑ツォルネック真弓 Takamura-Zorneck, Mayumi
(レーゲンスブルク大学 Universität Regensburg)

要旨/Zusammenfassung

2020年「会話力を育む—インターアクション能力育成のための会話教育」というテーマでドイツ語圏大学日本語教育研究会のシンポジウムが開催された。それに先立ち、ドイツ語圏の各大学の会話教育についてアンケート調査を実施し、27名から回答を得た。アンケートでは「会話教育に特化した授業」と「総合日本語の中での会話教育」という二つのテーマについて、対象者やレベル、教材や練習方法、問題点などを回答してもらった。

会話教育に特化した授業については、市販の教材を使うことの利点として、授業の準備が楽になることが挙げられた反面、違和感を覚える会話があることや、すぐ内容が古くなってしまふなどの問題点が挙げられた。また、学習者間のレベル差や参加人数が多いなどの運営上の問題のほかに、学習者のモチベーションの低さを挙げている回答者もいた。

総合日本語の中での会話教育については、学習者は筆記試験の成績にしか興味がないという問題点が挙げられた。また、学習項目が会話に向かなかつたり、逆に文型修得が目的になってしまつたりするという問題点も挙げられた。

Das 46. Symposium „Japanisch an Hochschulen e.V.“ zum Thema „Gesprächskompetenz fördern: Konversationsunterricht zur Verbesserung der Interaktionskompetenz“ hat im Jahr 2020 an der Universität Regensburg stattgefunden. Für die Vorbereitung hat die Autorin eine Online-Umfrage zum Thema „Konversationsunterricht“ durchgeführt. 27 Japanisch-Dozenten deutschsprachiger Hochschulen haben daran teilgenommen. In der Umfrage wurden verschiedene Fragen zu den zwei großen Themen, „Konversationsunterricht“ und „Konversationsübungen im allgemeinen Unterricht“ über Zielteilnehmer (Japanologie od. Sprachenzentrum), Lehrmaterialien, Übungen und Probleme bei der Durchführung des Unterrichts gestellt.

Bei den Antworten zum „Konversationsunterricht“ wurde festgestellt, dass die Lehrmaterialien, die es aktuell zu kaufen gibt, einerseits zeitsparend sind, aber andererseits „unnatürliche Konversationen“ enthalten oder „deren Inhalte schnell veralten“. Die großen Niveauunterschiede zwischen den Teilnehmern sind als organisatorisches Problem genannt worden. Außerdem wurde eine zu geringe Motivation bei den Teilnehmern als problematischer Punkt genannt.

Bei der „Konversation im allgemeinen Unterricht“ wurden u.a. folgende Punkte genannt. Manche Teilnehmer haben nur ein Interesse an schriftlichen Prüfungen. Außerdem ist die neu eingeführte Grammatik nicht für Konversationsübungen geeignet oder die Übungen dienen lediglich dazu, sich die Grammatik gut einzuprägen.

1 はじめに

本稿はドイツ語圏の大学における日本語の会話教育についてのアンケート調査の結果を報告するものである。

2020年ドイツ語圏大学日本語教育研究会 (Japanisch an Hochschulen e.V.、以下 JaH) のシンポジウムがレーゲンスブルク大学にて開催された。JaH はドイツ語圏における日本語教師会の一つであり¹、1994年以降、毎年一つのテーマを決め、ドイツ語圏の大学でシンポジウムを開催している。2020年のシンポジウムのテーマは「会話力を育む—インターアクション能力育成のための会話教育」だった。筆者がシンポジウム実行委員として「会話教育」をテーマに提案したのは、授業中、学習者同士の会話がうまく成り立たず、盛り上がりや欠けたり、そもそも教授方法に自信がなかったりして、困っていたからだ。レーゲンスブルク大学に日本学科 (Japanologie) はなく、筆者は言語コミュニケーションセンター (Zentrum für Sprache und Kommunikation) に勤める唯一の日本語講師である。そのため、日本語の授業について情報交換をする場は限られており、シンポジウムは貴重な情報交換の場になっている。そして、シンポジウムの3日間という限られた時間では、十分に各大学の会話教育についての情報が得られないと考え、ドイツ語圏の各大学がどのような会話教育を行っているのか、事前に JaH の会員を中心にオンラインのアンケート調査を実施することにした。

JaH の会員はドイツ語圏の高等教育機関に所属する日本語講師を中心に構成され、2020年6月時点での会員数は68名で、そ

1 ドイツ語圏の日本語教師会には他に「ドイツ語圏中等教育日本語教師会」「ドイツ VHS 日本語講師の会」「オーストリア日本語教師会」「スイス日本語教師の会」がある。

のうち約 78%にあたる 53 名がドイツ語圏の高等教育機関に所属している。国際交流基金のデータ²によると、2018 年の調査結果ではドイツ語圏の高等教育機関のうち、約 54 機関で日本語教育が実施されているという³。上記 53 名の JaH の会員のうち、一つの教育機関に複数の会員が所属していることと、国際交流基金の調査結果には反映されていない機関もあると思う⁴ので、基金の調査がドイツ語圏の日本語教育が行われている大学の現状をどれだけ正確に表すものかは言えないが、ドイツ語圏の大学 54 機関中 24 の大学（約 44%）の講師が本アンケート調査に回答したことは、ある程度意義があると言えよう。

まず、調査結果を報告する前に「会話」の定義を確認しておきたい。「話す」ことはいわゆる四技能の一つであり、日本語に限らず外国語学習には欠かせない要素である。ヨーロッパ言語共通参照枠（通称 CEFR, Common European Framework of Reference for Languages）でも、Speaking は一つの項目になっており、さらに Spoken Interaction（公式独訳 An Gesprächen teilnehmen）と Spoken Production（同 Zusammenhängendes Sprechen）の 2 つに分かれている[Council of Europe, Self-assessment grid, 2020]。Spoken Interaction は「An Gesprächen teilnehmen（和訳：会話に参加する）」という独訳からもわかる通り「対話」について、Spoken Production の独訳は「Zusammenhängendes Sprechen（和訳：筋の通った話をする）」となっており、「独話」に該当する。会話の授業では、二人以上の「対話」だけでなく、スピーチや口頭発表などの「独話」も練習すると思うので、この調査でもどちらも含むとした。

2 先行研究

会話教育についての研究はいくつかあるが、教師の教え方や悩み、疑問について調査したものは少ないようである。長坂・木田 [2011] では中国の大学で日本語教育に携わる中国人日本語教師を対象に質問紙調査を行い、会話授業で行われている様々な活動の頻度や、会話力向上に貢献する活動について項目ごとに重要度を尋ねている。また、会話指導の難点を挙げてもらい「日本人のものの考え方」や「自然な会話の日本語」を教える

2 国際交流基金 日本語教育機関検索 <https://jpsurvey.net/jfsearch/do/index> (2020 年 9 月 23 日)

3 通常 Gymnasium は高等教育機関に該当しないが、調査結果には一部含まれていたため、「約」とした。

4 実際にレーゲンスブルクにある Ostbayerische Technische Hochschule では日本語教育が行われているが、調査結果には表れていない。

のが難しいという非母語話者の立場からの問題や、母語話者教師でも同じような問題があると考えられる項目「授業や指導のしかた」「覚えた表現を実際に使って流暢に話すこと」「学習者の動機・意欲を強めること」「授業に適切な教材や資料を見つけること」という問題を明らかにした。

また秦は一連の研究 [2012, 2014, 2015, 2016] の中で中国の大学における会話教育の改善を目指し、学習者や教師に対する半構造化インタビュー調査を実施し、実態を明らかにしようとしている。学習者からは「自分たちの知的レベルに合う話をしたい」という希望が出ており、教師の教え方にも不満があることがわかった。例えば、訂正のし過ぎで自信がなくなることや教師主導で学習者が自ら発話権を取る機会がないという問題が挙げられた。

ドイツ語圏における日本語の会話教育における教え方についての研究は見当たらなかった。

3 調査概要

ここでは本調査の概要を述べる。

表1 調査概要

期間	2019年の10月から2020年の2月10日まで
方法	Google フォームを使用したオンラインアンケート調査
対象	JaHの会員（実施時の会員数68名）とシンポジウム参加者（非会員）
回答者数	24大学27名

ドイツ語圏の大学で行われる日本語教育には日本学科 (Japanologie) におけるものと、語学センターなどで行われる (日本学科専攻学生を除く) 全学対象のものがある。両者は対象者が異なるので、授業数や進度なども異なり、同等に捉えることができない。そのため、本調査では、担当授業の対象者を尋ねた。

また本調査では主に「会話教育に特化した授業」と「総合日本語の中での会話教育」という二つの大きなテーマについて回答してもらった。各授業の対象者のレベル、使用している教科書、市販教材を使用する上での利点や問題点、練習方法、会話の授業を行う上での疑問点・問題点などを一部記述式で回答してもらった。

4 調査結果

4.1 授業外での接触場面

まず、各大学における母語話者との授業外における接触場面の有無や可能性について質問した。海外における日本語教育で

は、日本における日本語教育とは異なり、母語話者と接することができる機会が限られている。会話教育においても授業内だけでなく、実際に教師以外の母語話者との接触場面があってこそ、授業で練習した会話を実践し、習得できると考え、この質問を設けた。

「学内でタンデムパートナー（言語交換パートナー）の紹介・仲介は行われているか」という問い（資料・質問項目 5）に対し、「紹介・仲介はしていないし、学内にもない（はずだ）」と回答したのは 1 名のみで、それ以外の 26 名が何らかの形で「行われている」と回答した。内訳は「タンデムパートナーの紹介・仲介を日本学内、語学センター内、日本語コース・クラス内、または教師個人が行っている」（15 名）、「日本語に限らずタンデムパートナーを仲介するポータルサイトが学内にある」（10 名）、「タンデムパートナーを持つことは奨励しているが、学生が各自で見つけることになっている」（10 名）となっている。この結果から、ほぼどの大学でもタンデムパートナーの紹介・仲介は行われており、タンデムパートナーを持つことが重要視されていることがわかる。

また、「学内で日本語母語話者との交流会（Stammtisch）などは開催されているか」という問い（資料・質問項目 6）には、「把握していない」「開催されていないと思う」と回答したのは 2 名だけで、定期、不定期、学内、学外にかかわらず何らかの形で母語話者と交流する機会があると回答した。また、「把握していない」という回答者と同じ大学に勤める別の回答者からは、「定期的に開催されている（ようだ）」という回答があった。このことから、1 つの大学を除き、何らかの形で交流会が行われていることがわかった。

大学の規模により日本のパートナー校の数や日本人留学生の数はまちまちである。また、パートナー校が多くても日本人留学生と日本語学習者が自然に知り合う機会は少ない。そこで、講師や大学などがタンデムパートナーや交流会などの接触場面を紹介することは、会話力を促進する上で意味があると考え。筆者も前任者から交流会を引き継ぎ、2006 年 11 月から 2020 年 3 月上旬まではほぼ毎週交流会を開催していた。タンデムパートナーについても日本人留学生を紹介し、興味のある学習者には授業外で定期的に日本語を話したり、聞いたりする機会を与えてきた。タンデム学習が学習者オートノミーを高めることは脇坂 [2012] でも指摘されており、そのような機会を活用しようとする学習者は日本語の学習に対する意欲が高く、会話に関しても、上達が速く、話し方も自然であるという印象がある。今回の調査で、他大学にも同じような取り組みがあることがわかった。

4.2 会話に特化した授業

次に具体的な授業内容についての質問に入り、会話に特化した授業について尋ねた。このセクションでは授業名（履修登録されているコース名）、対象者が日本学専攻の学生か全学対象（日本学専攻以外の学生）か、対象者のレベル、教科書使用の有無と使用している教科書名、市販の教科書・教材を使用する上での良い点と問題点、授業での練習内容、会話の授業を行う上で苦労している点や疑問点・問題点などを主に記述式で回答してもらった。

4.2.1 会話に特化した授業の概要

現在、または過去3年以内に会話に特化した授業を実施している（資料・質問項目7）と回答した人は27名中11名（9大学）で、挙げられた授業数は19あった（資料・質問項目8）。そのうち全学対象の授業は2つで、残りは全て日本学科対象だった（資料・質問項目9）。恐らく、全学対象の授業の講師は非常勤であることが多く、担当授業数も限られているので、会話に特化した授業を実施する時間的余裕がないのだと考えられる。対象学習者のレベル（資料・質問項目10）は初級から初中級にかけてが圧倒的に多いことがわかる。

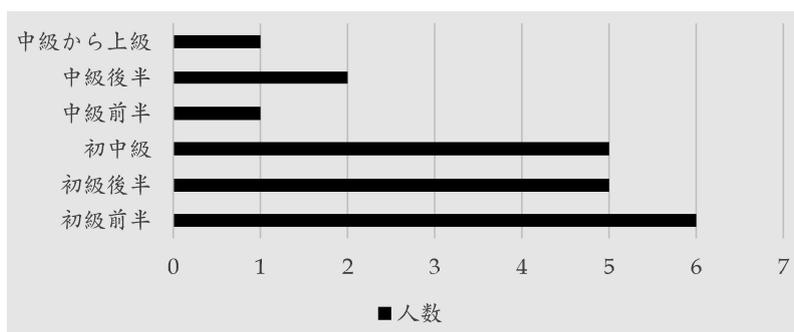


図1 会話に特化した授業の対象レベル

4.2.2 会話に特化した授業における市販の教科書使用

次に市販の教材・教科書の使用について尋ねた（資料・質問項目11）。「市販の教科書・教材を使用している」「教科書・教材を使用していない」がそれぞれ9名ずつ⁵、「大学または各

5 1つの授業につき、「市販の教科書・教材を使用している」「教科書・教材は使用していない」のどちらも選択している回答があり、回答者からの注

教員で作成した教材を使用している」は 4 名だった。「市販の教科書・教材」と「大学または各教員で作成した教材」を併用しているという回答も 1 名あった。使用している市販の教材（資料・質問項目 12）としては、下記の教材が挙げられた。

表 2 会話に特化した授業で使用している教材

書名	出版社	人数
『みんなの日本語初級』Ⅰ,Ⅱ	スリーエーネットワーク	4名
『J. Bridge for Beginners』 Vol. 1	凡人社	3名
『できる日本語初級』	アルク	1名
『げんき 1』	ジャパントイムズ	1名
『エリンが挑戦！日本語できます』	凡人社	1名
『シャドーイング日本語を話そう初～中級編』	くろしお出版	1名
『上級へのとびら』	くろしお出版	1名
『毎日の聞き取り』上,下	凡人社	1名
『楽しく話そう』	凡人社	1名
『楽しく聞こう』Ⅰ,Ⅱ	凡人社	1名
『日本語集中トレーニング』	アルク	1名

総合日本語における使用教科書については後述するが(4.3.2)、『みんなの日本語初級』を挙げている大学が 9 校あった。その影響か、会話に特化した授業でも『みんなの日本語初級』を教材として使用していると回答が 4 名あった。『みんなの日本語初級』は文法積み上げ式の総合教科書であり、会話練習としては『会話』と『練習 C』が中心で、学習者の自由な会話を促すタイプの練習はない。会話に特化した授業で使用するには、教師の工夫が必要であると考えられるが、今回の調査では、具体的にどのように教材を使用しているかまでは、聞くことができなかった。よって、これについては、今後の課題としたい。

同じ総合教科書の中では『J. Bridge for Beginners Vol. 1』や『できる日本語』は、学習者がより自主的に話すことを目指す教材であり、比較的、会話に特化した授業において学習者の自由な会話を促しやすいと思われる。筆者も実際に『できる日本語』を会話に特化した授業で使用しているが、会話練習の際の学習者同士のレベルの組み合わせがうまく合えば、互いに不足している情報を補い合い、色々な表現が生まれやすいと実感してい

意書きとして「ある教材のビデオを一部使用していますが、その他は市販の教材は使用していません。」とある。

る。逆に、学習者の語彙力や文型などの知識が足りないと、会話がうまく成立せず、活発な教室活動が行われない。

次に市販の教科書・教材について、使用する上での良い点や問題点を記述式で回答してもらった（資料・質問項目 13）。以下、鍵括弧内に回答を原文のまま引用する。市販の教科書・教材の利点としては、「授業の準備が少し楽になる」「少し手を加えれば、使える」といった手間が軽減できるという利便性重視の点から、「日本の様々な場面が見られる」「教師以外の日本語（声、表現）が聞ける」「教師の独断にならずに授業ができる」「テーマに沿って読み物や会話文、会話練習などがある」といった会話の多様性を重視する点、また、「話す、書く能力がつく」「最初から言語運用力重視」「学習者が学習内容を把握しやすく筆記試験対策になる」といった語学授業の総括的な点まで様々な意見があった。

問題点としては下記の項目が挙げられた。「音声那不自然（例：アニメ声）」「むりやりこじつけた感がある会話があり、違和感を覚え、使いにくい」「会話文が長すぎて、会話らしくない」「会話が機能と合っていない課がある」「（文法積み上げ式で）会話につながりにくい文法項目がある」「テーマやタスクが学生に合わない場合がある」といった会話（内容・音声など）の不自然さが挙げられた。教科書における会話の不自然さについては川口 [2005] でも指摘されている。またテーマによっては「数年経つと内容が古くなってしまう」という会話教材に限らず、語学教材の持つ普遍的な問題も挙げられた。また、「必要だと思われるスキルが教材ではカバーされていない」という不満や「教科書の内容は網羅しておいたほうがいいのではないか」と思ってしまう」という点を挙げた回答者もいた。利点として「少し手を加えれば、使える」というのがあったが、逆に問題点として「使いやすいように変更するのにアイデアが必要で時間がかかる」という点を挙げた回答者もいた。また、「教科書ばかりだと『教科書ばかりでつまらない』と言われる（使わないと、『せっかく買ったのに』と言われる）」というジレンマを挙げた回答者もいた。

4.2.3 会話に特化した授業における練習方法

次に授業での練習方法を聞いた（資料・質問項目14）。

表3 会話に特化した授業における練習方法

練習方法	人数
ペア・グループワーク	6名
プレゼンテーション（グループ・教室・ビデオ会議システム）とその後の質疑応答	4名
ディスカッション・議論	3名
ロールプレイ・そのビデオ撮影	3名・1名
インフォメーションギャップ	2名
シャドーイング	2名
聴解練習	2名
インタビューと結果発表	2名
物語を作る	1名
寸劇（会話の役になりきって演じる）	1名
表現の定着を図るための口頭練習	1名
日本の大学とのオンラインコミュニケーション（タンデム）	1名
日本人留学生を呼んでコミュニケーション	1名

結果を見ると、「ペア・グループワーク」が多いことがわかる。「ロールプレイ」や「インフォメーションギャップ」もペア・グループワークの中の一つの練習方法ではあるが、回答者が具体的に練習方法として挙げたものは、別の扱いとした。「聴解練習」や「シャドーイング」といった相手を必要としない受け身の練習から、「ロールプレイ」や「インフォメーションギャップ」といった少し自由度の高い会話が行われるもの、さらに「プレゼンテーションと質疑応答」や「インタビュー」などの独話と対話の組み合わせ、「ディスカッション」や「寸劇」といった高度な技術が必要とされる練習を行う授業もあり、練習方法は多岐にわたった。

この結果から、教師がそれぞれの環境を最大限に活用し、様々な工夫を凝らして授業を行おうとしていることがわかる。また、会話に特化した授業のため、インタビューや寸劇、日本語母語話者とのコミュニケーションなど総合日本語の授業ではなかなか行えないような練習をしていることがわかる。

4.2.4 会話に特化した授業における疑問点や問題点

次に会話授業をしている上で苦勞している点や問題点を挙げてもらった（資料・質問項目15）。「モチベーションの高くない学習者が参加すると、コンセプトが成立しなくなる」といっ

た学習者側の問題、「積極的参加が求められる授業なので、10名ぐらいのクラスサイズが限界」「宿題の負担が大きい」といったクラス運営における問題、「発音やイントネーションがうまくフィードバックできない」「『このテーマで議論することの必然性』は『ない』ので、『議論のための議論』『内容は二の次でよい』と言われてしまう余地がある」といった教える技術や授業内容の意義についての問題も挙げられた。

さらに上記のモチベーションが高くない学習者への対応として「話したい人とあまり話したくない人をバランスよくグループに配置する」といった工夫を挙げている回答者もいた。また、「常に『教え過ぎない』ことを心掛けている。学習者の自主性・主体性が十二分に発揮されるようなテーマ・課題の提示、さらに受講者の活動状況を注視しながら適切なアドバイスをするタイミングなどに対して最大限の配慮をしている」といった心がけについても意見が挙げられた。

最後に会話授業をする上での疑問点を挙げてもらった（資料・質問項目16）。「誤用の扱い：直すべきか、どの程度、どのタイミングで直すか」「効果的なフィードバックの方法」「発音指導により改善できる学習者と全くできない学習者の差はどこからくるのか」といった誤用やフィードバックに関する疑問、「初級からどんなことができるか」「ロールプレイの際、何を話すか先に書くのがいいことなのか」「既習項目や語彙を使って少し難しい表現にもチャレンジするように促す方法を知りたい」「コミュニケーションが成立するかという観点で評価しているが、調査やデータなどに基づいた内容の発表・議論をしてもらいたい。内容の水準をどうやって維持・向上させるか」「いかに相手側から送られてくる情報の趣旨を把握し、さらに自らの考え・意見を簡潔に伝えられるのか、そのための効果的な教育方法」という授業方法への疑問、さらに、「話したくない学習者、話せるようになる必要はないと思っている学習者への対応」の仕方といった学習者の動機に関することまで多岐にわたった。

4.3 総合日本語クラスにおける会話教育について

次のセクションでは総合日本語における会話教育について質問した。総合日本語とは、「会話」や「読解」など各技能を細分化したクラスではなく、四技能を総合的に学習することを目的としたレベルごとに学ぶクラスのことである。「総合教材」⁶

6 凡人社の『日本語教材リスト』No. 47 (2018-2019) では目次に「総合教科書」、スリーエーネットワークでも HP 上 (<https://www.3anet.co.jp/np/list.html>) の『みんなの日本語』のタグに「総合教科書」とある (2020 年 9

と呼ばれる教材がメインの教科書として使用されることが多い。
このセクションでは、担当クラスでの会話活動について質問した。

4.3.1 総合日本語クラスの概要

今現在、もしくは過去 3 年以内に総合日本語を担当している（いた）かという問い（資料・質問項目 17）に対して 27 名中 23 名（84%）が「現在担当している」、1 名が「3 年以内に担当していた」、3 名が「担当していない」と回答した。

担当しているレベルは下記の通りである（資料・質問項目 18）。

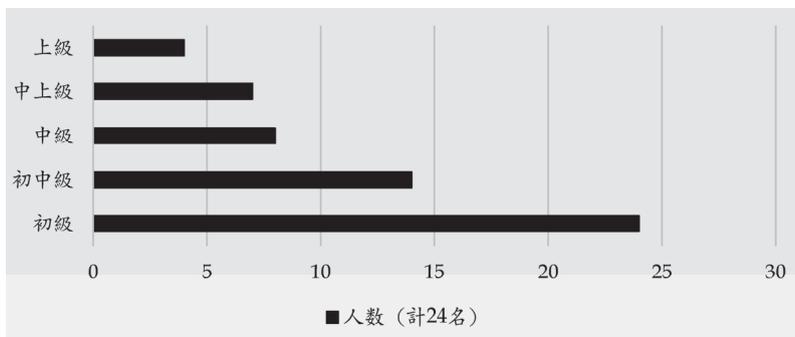


図 2 総合日本語クラスの対象者レベル

初級 24 名、初中級 14 名、中級 8 名、中上級 7 名、上級 4 名だった。担当していると回答した全員が初級を担当しており、上のレベルにいくほど、人数が少なくなっている。会話に特化した授業の図 1 と同様に、初級が一番多く、似たような結果になっている。

4.3.2 総合日本語における使用教科書

次に総合日本語で使用している教科書について教科書名とレベル（回答時の表記をそのまま採用）を尋ねた（資料・質問項目 19）。

月 25 日)。『初級日本語げんき』の HP 上 (<http://genki.japan-times.co.jp/about>) の紹介文には「総合教材」と書かれている (2020 年 9 月 25 日)。

表4 総合日本語で使用している教科書

書名	レベル	出版社	大学
『みんなの日本語初級』I,II	初級・ 初中級	スリーエーネットワーク	9校
『まるごと』A1,A2	A1・A2	三修社	3校
『J. Bridge for Beginners』Vol.1,2	A1・B1	凡人社	2校
『みんなの日本語中級I』	中級	スリーエーネットワーク	2校
『上級へのとびら』	中級	くろしお出版	2校
『Grundstudium Japanisch』1,2	初級・ 初中級 中上級	Bildungshaus Schulbuch- verlage Konkordia	1校
『初級日本語げんきI』	初級	ジャパントイムズ	1校
『できる日本語』初中級,中級	初中級	アルク	1校
『日本語生中継 初中級』	初中級	くろしお出版	1校
『日本で学ぶ留学生のための 中級日本語教科書 出会い』	B1	ひつじ書房	1校
『場面による実際の日本語』	初級	ハイデルベルク大学	1校
高等学校『現代社会』	中上級		1校
『Japanisch-Grundkurs』	初級	ボーフム大学	1校
自作教科書			2校

総合日本語で使用される教科書は大学ごとに採用することが一般的なので、ここでは大学数で見ることとする。9校に採用されている『みんなの日本語初級』が、他に比べ、圧倒的に多い。『みんなの日本語初級』は1998年に初版が発売され、2012年には改訂版の第二版が発売されている。また、英語だけではなくドイツ語の『翻訳・文法解説』もあり、副教材も充実している。文法積み上げ式で、歴史ある⁷教科書であるが、現在も支持されているのがわかる。次は3校採用の国際交流基金が開発した教科書『まるごと』だが、2013年初版で、入門(A1)から中級2(B1)まで出ている。『まるごと』を使用している3校は全て日本学科がなく、全学対象の日本語教育を行っている大学であり、時間数が限られている全学対象では使いやすいのかもしれない。さらに『J. Bridge for Beginners』『みんなの日本語中級I』『上級へのとびら』と続く。『J. Bridge for Beginners』は

7 1974年『日本語の基礎』、1990年『新日本語の基礎』の流れから、1998年に『みんなの日本語』の初版が、そして2012年には『みんなの日本語』の第二版が発売された。語彙や会話練習の提示方法が変わったなどの変化はあるが、基本的な構成はほとんど変わっていないという意味で、「歴史ある教科書」とした。

初級教材だが、B1 レベルでも採用されている。また、『みんなの日本語中級 I』『上級へのとびら』は中級教材である。日本学科のある大学では、初級から、中級、さらに上級レベルへ持ち上げることが必要とされるので、教材選びも重要となる。今回は、総合教科書を採用した理由を問わなかったので、今後の課題としたい。

次に総合日本語の授業で学習者の会話をうまく促進できる教材の有無について尋ねた（資料・質問項目 20）。「あるし、実際に使用している」10 名（44%）、「自作教材」6 名（26%）、「知らない」4 名（17%）、「あるが、別の教材を使用」2 名（9%）、「一部良いと思うが使用せず」も 1 名（4%）いた。

次に上記の回答に該当する教科書名を挙げてもらった。

表 5 会話力を促進できる教材

書名	出版社	人数
『J. Bridge for Beginners』 Vol. 1, 2	凡人社	3 名
『まるごと 日本のことばと文化』 入門 A1, 初級 A2	三修社	3 名
『できる日本語』	アルク	2 名
『日本で学ぶ留学生のための 中級日本語教科書出合い』	ひつじ書房	1 名
『日本語生中継』	くろしお出版	1 名
『クラス活動集 101』 『続・クラス活動集 131』	スリーエーネットワーク	1 名
『楽しく話そう』	文化外国語専門学校	1 名
『教科書を作ろう』	国際交流基金の教室活動集 Web 版 ⁸	1 名
『初級日本語 げんき』	ジャパントイムズ	1 名
『上級へのとびら』	くろしお出版	1 名
『トピック別現代日本語 1』	自主開発教材	1 名
『場面による実際の日本語』	自主開発教材	1 名

実際に授業で使用している教科書（表 4）と、会話を促進できるお勧めの教材（表 5）を比較してみると、差があることがわかる。例えば、ドイツ語圏でもよく使われている『みんなの日本語』は初級、中級合わせて授業で使用している人が多いのにもかかわらず、お勧めの教材として挙げる人はいなかった。これは『みんなの日本語』が文法積み上げ式の教科書で、教科

8 『教科書を作ろう』国際交流基金 https://www.jpff.go.jp/j/urawa/j_rsrcs/textbook/nyuusyu.html (2020 年 9 月 25 日)

書本編の練習として『会話』や練習 C があるものの、自由な会話につなげにくいからではないだろうか。

4.3.3 総合日本語における練習方法

次に授業でどのように「会話」させているかを記述方式で尋ねた（資料・質問項目 22）。

表 6 総合日本語での「会話」の練習方法

練習方法	人数
ロールプレイ	11名
ペアワーク	5名
模範会話例を参考に会話文を作らせる	5名
ディスカッション	2名
プレゼンテーション	2名
クイズ、ゲーム	2名
スモールトーク、フリートーク（会話の流れだけ設定）	2名
シャドーイング	1名
インタビュー	1名
タスクシート	1名
インフォメーションギャップ	1名
プロジェクトワーク	1名
会話を聴解した後に会話を復元させる	1名
日本人留学生とのセッション	1名
スピーチとその後の質疑応答	1名
宿題の作文について、話し、質疑応答、議論させる	1名
読解した文章について意見を発表し、議論させ、その内容を報告させる	1名

結果を見ると、「ロールプレイ」や「ペアワーク」、「ディスカッション」などといった「対話」の練習が多い。中でもロールプレイは約 45%の回答者が行っており、主要な練習方法の一つであることがわかる。次いで、「ペアワーク」と「模範会話例を参考に会話文を作らせる」が各 5 名ずつ（20%）と続く。今回の質問方法では、どの練習方法がどのレベルで実施されているかまでは把握することができなかつたので、レベルごとの練習方法について、今後、掘り下げる必要もあるだろう。

対話の練習に比べ、独話については「プレゼンテーション」と「スピーチ」の 2 例と少ない。もちろん、一連の練習の中に独話が含まれるものもある（「読解した文章について意見を発表し・・・」）が、総合日本語のクラスでは対話の練習がよく行われていることがわかる。

4.3.4 総合日本語における会話練習での疑問点や問題点

次に総合日本語の授業で「会話」をさせる際に苦勞している点や問題点を挙げてもらった(資料・質問項目 23)。「『会話したい』と思わせること」「動機付け・必然性・知的好奇心を満たすこと」「学習者に知識・経験・意見・興味がないと会話が弾まない」「会話に重点を置く授業よりむしろ総合的な学習や筆記試験で良い成績評価を得ることに多くの学習者は興味がある」「期末試験が筆記のみで口頭試験がないため、学習者に対する会話練習の動機付けが難しい」といった学習者の動機付けについてのコメントが目立った。総合日本語では、「会話」をすることだけが目的ではないので、「会話」に特化した授業のように学習者の意志でその授業を選択したわけではなく、義務で出席している学習者もいるのだと考えられる。試験結果や成績が動機付けに直結してしまっているという指摘もあった。

「スムーズな会話を促す課題設定」「フィードバックや訂正の仕方」といった授業方法やフィードバックの方法についても疑問点・問題点が挙げられた。また、「指導すべき要素が発音、語彙、文法、表現など多面的で、さらに個人差があるため、時間を要する」「現場に合った会話状況を考え、教材を作成するのに時間がかかる」といった指導や、教材作成のための時間がかかりすぎるという問題を挙げた回答もあった。さらに「学習者間の日本語能力の差異」や「学習者が母語(ドイツ語)を使いすぎる」ことが授業をスムーズに運営する上で問題になるという指摘もあった。「同じパートナーとの会話練習によるマンネリ化」という問題も挙げられた。

最後に総合日本語の授業で「会話」を促す際の疑問点や知りたいことを挙げてもらった(資料・質問項目 24)。「会話の重要性、会話の練習をすることで、どのような言語能力が伸びるのか」といった根本的な疑問から、「初級後半に入ると、学習項目が会話に向かない場合がある」という問題点が挙げられた。また、「社会的な人間関係に応じた適切な会話表現を、日本語レベルに合わせて適切に導入したり、指導したりできているかどうか。また、その際に、学習者がどの程度理解し、運用能力として身につけることができているか」という悩み、さらに「他大学では、どのような会話教育・授業(活動やタスク)がされているのか。会話能力を伸ばすための具体的な実践方法」といった他大学との情報交換の必要性、「非母語話者の教師として読解の授業でも会話の練習を入れるアイデア」という非母語話者教師からの発言や、「全学対象日本語コースの非常勤講師は授業時間、契約時間も制限され活動範囲は限られる。その中で、できることは何か。」といった全学対象、さらに非常勤講師とい

う時間的な制限の中でどんなことができるのか知りたいという声もあった。

5 シンポジウムでの活動

シンポジウムでは、2日目に当調査の結果を報告する時間を取った。15分という限られた時間だったので、事前にメールで参加者に資料を配布し、目を通しておいてもらった。発表後、すぐに参加者による授業紹介がポスター発表形式で行われ、様々な授業の紹介が行われた。この授業紹介は各教師（シンポジウム参加者）が取り組んでいる授業について発表するもので、一つの所属機関から複数の講師が授業紹介に参加し、それぞれの授業を紹介することもあった。授業紹介自体は、会話教育に限らなかったが、事前に会話教育における問題点や悩みなどを参加者で共有できたことで、授業紹介の時間や、その後の会話教材を作るワークショップ、また自由時間に参加者同士がコミュニケーションを取る際のいい話題提供になったと思う。シンポジウム後のアンケートではシンポジウムの参加者46名中29名が回答し、当アンケート調査の結果報告について「よかった」（44.8%）、「とても興味深く参考になった」（41.4%）⁹と概ねポジティブなフィードバックが返ってきた。

6 今後の展望

筆者はシンポジウムが始まる直前の2019/2020年冬学期に「Japanisch Hören und Sprechen（訳：「日本語を聞く・話す」）」という授業で、シンポジウムの参加者のために、レーゲンスブルク駅から大学、さらにシンポジウム会場までの道案内のビデオを作成した。学習者は3つのグループに分かれ、原稿作り、ビデオ撮影、アフレコ、そして字幕付けをして、Youtube上に公開するビデオ¹⁰を作成した。参加した学習者にも大変好評で、実際に役に立つ物を作り出すという工程が楽しかったそうだ（授業アンケート調査の回答より）。今までこの授業では、教室内での会話練習に留まっていたが、初めて実際に日本語母語話者のための実践的な試みができたとと思う。今回のアンケート調査では明らかにできなかったこともあるので、これ

9 上記以外には「あまり参考にならなかった」（6.9%）、「参加していないので、わからない」（3.4%）、「報告のスピードが速すぎたのが残念でした」（3.4%）という回答があった。

10 ビデオは <https://www.youtube.com/channel/UCM3oxzGKVyjAul0pD2LyyqLA> で閲覧できる。（2020年12月9日）

からも試行錯誤を重ねながら、よりよい会話教育が実践できるよう、他大学の講師との情報交換を続けて、調査を重ね、この研究をさらに掘り下げていきたい。

謝辞

本アンケート調査や論文執筆にあたり、シンポジウムに招聘講師として来ていただいた東京外国語大学の中井陽子先生、そして JaH の高橋淑郎元会長、安藤由夏元副会長をはじめ、役員会や査読の方々にも多大なるご助言、ご指摘をいただきました。また、お忙しい中、アンケートにご協力くださった皆様にも、ここに感謝の意を表します。

【参考文献】

- 尾崎明人・椿由紀子・中井陽子 2010.『会話教材を作る』スリーエーネットワーク,東京.
- 川口義一 2005.「日本語教科書における『会話』とは何か—ある『本文会話』批判—」『早稲田大学日本語教育研究』6号, 1-13.
- 秦松梅 2012.「中国人学習者は事前課題と日本語母語話者の参加を取り入れたグループワークによる内容重視の会話授業をどう受け止めたか：中国の大学における日本語専攻クラスの場合」お茶の水女子大学日本言語文化学会『言語文化と日本語教育』44巻,21-30.
- 秦松梅 2014.「中国大学における日本語を専攻している学習者の会話教育の実態—日本語中上級学習者を対象に—」お茶の水女子大学『平成 25 年度「学生海外派遣」プログラム報告集』37-41.
- 秦松梅 2014.「内容上の事前準備は会話参加をどのように促し支えるか—中国の日本語専攻大学生を対象とした会話活動におけるやりとり分析から—」『人間文化創成科学論叢』16巻, 87-95.
- 秦松梅 2015.「日本語会話授業の問題点に対する捉え方—中国の大学における日本語専攻の学習者の場合—」『日本語教育』161号,15-29.
- 秦松梅 2016.「中国の大学における日本語会話教育に対する捉え方についての考察—日本語教師への半構造化インタビューを通して—」お茶の水女子大学『平成 27 年度「学生海外派遣」プログラム報告集』1-5.
- 長坂水晶・木田真理 2011.「中国の大学の日本語授業における会話指導に関する調査—中・上級レベルを対象とした教室活動

の実態と教師の意識」『国際交流基金日本語教育紀要』7号、43-57.

脇坂真彩子 2012. 「対面式タンデム学習の互恵性が学習者オートノミーを高めるプロセス：日本語学習者と英語学習者のケース・スタディ」『阪大日本語研究』24号、75-102.

Council of Europe 2020. Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment (CEFR). <https://www.coe.int/en/web/common-european-framework-reference-languages> (2020年9月25日)

資料 アンケート調査 質問紙

「会話教育についてのアンケート」

来年 2020 年のドイツ語圏大学日本語教育研究会のシンポジウムは、2月28日から3月1日までレーゲンスブルク大学で行われます。「会話力を育む—インターアクション能力育成のための会話教育—」というテーマで開催されますが、各大学間の情報交換と現状把握のために是非アンケートにご協力いただけないでしょうか。シンポジウムに当日参加できない方も是非ご回答ください。ご自身が担当している授業についてお答えください。アンケートの結果はまとめてシンポジウムにて高邑が発表する予定です。お忙しいことと存じますが、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

「会話教育」とは「口頭表現」について授業で指導することを指します。スピーチなどの「独話」、コミュニケーションを目的とした「会話」どちらも含みますので、それを踏まえた上でお答えください。

第26回シンポジウム実行委員
レーゲンスブルク大学
高邑真弓

1. 回答者の氏名（会話教育の実態を知るという目的のため、氏名をご記入ください）
2. メールアドレスをご記入ください。回答について、伺うことがあるかもしれませんが、アンケート以外には使用しませんので、よろしくお願いいたします。
3. 大学名（ドイツ語名。非ドイツ語圏の場合は英語名）
4. 大学名（日本語名）

あなたが所属している教育機関における日本語環境についての質問です。

5. 学内でタンデムパートナー（言語交換パートナー）の紹介・仲介は行われていますか。
 - － タンデムパートナーの紹介・仲介はしていないし、学内にもない（はずだ）。
 - － タンデムパートナーの紹介・仲介を日本学内、語学センター内、日本語コース・クラス内、または教師個人が行っている。
 - － 日本語に限らずタンデムパートナーを仲介するポータルサイトが学内にある。
 - － タンデムパートナーを持つことは奨励しているが、学生が各自で見つけることになっている。
 - － 把握していない。
 - － その他（記述式）
6. 学内で日本語母語話者との交流会（Stammtisch）などは開催されていますか。
 - － 定期的に開催されている（ようだ）し、自分も（時々）参加している。
 - － 定期的に開催されている（ようだ）が、自分は不参加だ。
 - － 不定期に開催されている（ようだ）し、自分も（時々）参加している。
 - － 不定期に開催されている（ようだ）が、自分は不参加だ。
 - － 交流会以外に日本語母語話者と学生が交流する機会がある。
 - － 学外で交流会が開催されている（ようだ）。
 - － 把握していない。
 - － その他（記述式）

ここからはご自身が担当している授業についてご回答ください。計2つの授業（授業Aと授業B）についてお聞きします。ご自身が担当している授業のうち、一つか二つお選びになり、それぞれの授業についてお答えください。自由記入欄で授業Aと授業Bの内容が同じ場合、コピペで回答していただくと助かります。

7. 「会話教育」を主な目的とした授業を担当していますか。または過去に（3年程前まで）担当していましたか。
 - － はい。
 - － いいえ。（以下の質問には無回答のまま、次のセクションまでお進みください）
8. 「ある」と回答した方は授業名を原文（履修登録されているコース名）でお答えください。各授業についてそれぞれ回答していただくため、一つの授業名をお書きください。（授業A）

9. その授業は日本学 (Japanologie)、またはそれに準ずる学科ですか、それとも全学対象の授業ですか。(授業 A)
 - － 日本学、またはそれに準ずる学科
 - － 全学対象
10. そのクラスの対象者のレベルはどのくらいですか。(授業 A)
 - 初級前半・初級後半・初中級・中級前半・中級後半・上級前半・上級後半・超級・その他(記述式)
11. その授業ではどのような教科書・教材を使っていますか。(授業 A)
 - － 市販の教科書・教材を使用している。
 - － 大学または各教員で作成した教材を使用している
 - － 教科書・教材は使用していない。
12. 市販の教科書・教材を使用している場合は、書籍名、出版社、レベルなどをご記入ください。(授業 A)
13. 市販の教科書・教材について、使用する上でのいい点や問題点などを簡潔に(箇条書きなどで)記述してください。(授業 A) (市販の教材を試用していない場合も是非ご記入ください)
14. 授業で具体的にどのような練習を行っているか簡潔にいくつか例を挙げてください。(授業 A)
15. 会話の授業を行う上で苦勞している点や問題点は何ですか。簡潔に(箇条書きなどで)ご記入ください。(授業 A)
16. 会話の授業を行う上での疑問点がありますか。具体的にどのようなことを知りたいですか。簡潔に(箇条書きなどで)ご記入ください。(授業 A)

*以下授業 B について 8 から 16 までの質問の繰り返し

ここからは総合日本語のクラスについての質問です。

総合日本語を担当している場合は是非お答えください。

17. 総合日本語を担当していますか。または、過去にしていたか。
 - － 担当している。
 - － 現在は担当していないが、過去 3 年以内に担当していた。
 - － 担当していない。(以下の質問には無回答のまま、次のセクションまでお進みください)
18. 上記質問で「担当している」「過去 3 年以内に担当していた」と回答された方はどのレベルを担当していますか。
 - 初級 ・ 初中級 ・ 中級 ・ 中上級 ・ 上級
19. 総合日本語で使用している教科書はどれですか。レベルと教科書名をお答えください。
20. 総合日本語の授業で学生の会話をうまく促進できるお勧めの教材はありますか。
 - － あるし、実際に使用している。

- － あるが、使用しているのは別の教材だ。
 - － 知らない。
 - － その他（記述式）
21. 上記で「ある」と答えた方は該当する教科書名と出版社などをご記入ください。
 22. 総合日本語の授業では学生たちにどのように「会話」をさせていますか。（例：ロールプレイ）
 23. 総合日本語の授業で「会話」をさせる場合に苦勞している点や問題点は何ですか。簡潔に（箇条書きなど）でご記入ください。
 24. 総合日本語の授業で「会話」を促す上での疑問点はありますか。具体的にどんなことを知りたいですか。簡潔に（箇条書きなど）でご記入ください。
シンポジウムに期待すること・知りたいこと
 25. このシンポジウムに期待すること、またシンポジウムで知りたいこと、情報交換したい内容などを書いてください。

ご協力ありがとうございました。

アンケートはこれで終わりです。また、シンポジウムについてのご意見などがございましたら、遠慮なく高邑までご連絡ください。